

山口哲言子全集

第六卷

水原秋桜子
富安風生
山口青邨

大野林火
平畑静塔

監修

明治書院

山口哲子全集

第六卷
古典研究集

山口誓子全集 第六卷

三八〇〇円

著者 山口誓子

昭和五十二年五月二十五日發行

發行者 明治書院 代表 三樹彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田中忠

發行所 株式會社

明治書院

千代田區神田錦町一―十六八一〇一V
電話二九四―五三三六 振替東京三十四九九一

山口誓子 第六卷 古典研究集

目次

第一章 芭蕉・蕪村研究

芭蕉に就ての感想……………二

須磨・明石……………三

芭蕉書翰……………九

書……………七

芭蕉の言葉……………八

芭蕉の再認識……………九

大阪と芭蕉……………六

古典としての蕪村俳句……………一〇

第二章 子規研究

山莊閑談……………一三

子規の生長と小説……………一三

角 定……………一六

須 磨……………一七

嵯峨日記……………五

真偽……………一六

旅……………六

師 弟……………七

老と病と……………八

連句との交流……………九

敦賀―大垣……………一〇

わが蕪村……………一〇

正岡子規論……………一七

翁 墳……………一三

子規と愚庵……………一四

子規と漱石……………一五

子規と西洋……………	一三	正岡子規……………	一七
子規と現代俳句……………	一〇	ヘミングウェイと子規……………	一五
子規から茂吉へ……………	一六	子規と虚子……………	二〇
子規の俳句について……………	二四	子規の文章……………	二二
第三章 芭蕉俳句鑑賞……………	二七		
第四章 蕪村俳句鑑賞……………	二九		
解題……………		松井利彦……………	二五
解説……………		松井利彦……………	二九

第一章 芭蕉・蕪村研究

芭蕉に就ての感想

人間の意識といふものに就ては、学問的にはちやんとした説明の仕方があらうと思ふけれど、それはさて置いて、人間の意識といふものは、燈の^{あかり}とぼつてゐるときと、燈の^{あかり}とぼつてゐないときとがある。意識の洋燈は、点いたり、消えたりする。普通、人間の意識には、さういふ明暗があり、またさういふ明暗のあるといふことが許されてゐる。

ところが、芸術の場合はちがふと思ふ。芸術に於ては、意識の洋燈を消さないやうに、絶えず気を配つてゐなければならぬ。いや、たと單に、燈が消えずにとぼつてゐるだけではなく、それが一点煌として光り耀いてゐなければならぬ。その光度は、明るければ明るい程いゝ。

もしも、燈が消えかゝつてでもゐるものなら、第一通行人が黙つてはゐない。口々に「燈を明るくせよ」と呼ばはるにちがひない。

これは芸術の場合に限られるのだからそれでも構はないものゝこれが日常普通の場合にもさうだつたら溜つたものではない。意識の洋燈を点けどはしにすれば、芯は燃えきつてしまふし、意識の白夜がいつまでもつゞいたら、しまひには身体が持たなくなる。

だから日常生活に於ては、へまをやらすにすまさうと思つてもさうはゆかないが、芸術生活に於ては、へまをやらすに

すまさうと思へば、やらすにすむ。

芸術のことは、万事きりきりつと逼迫したものなのである。

芸術に於けるさういふ覚悟のほどを、「窮屈なチヨツキを解き放さうとしない」とひとは云ふけれど、窮屈でもなんでも、このチヨツキは脱いではならんぞ。

いつも、すぐれた故人の芸術的業績を顧るときに、感ずることは、意識の光度のことである。こゝでは芭蕉のことだけを考へる。

芭蕉は「我俳諧撰集の心なし」と云つたりして——蕪村も「発句集はなくてもありなんかし」と云つたが——その生前には自分自身の家集といふものを持たなかつた。その為の後世のひとがかき蒐めた芭蕉俳句集は、二目とは見られないものであつた。川底に沈んでゐるもので、わざわざ浚渫機で掘み揚げたりした。さういふ芭蕉俳句集を読んでみると、怖い暗闇で、それに光度の高いものがはつりはつりと数へられるのである。

さういふ芭蕉俳句集を問題にするのは意地が悪いと云ふなら、芭蕉の自ら書き遺した「紀行もの」を問題にしよう。これ等は芭蕉自らが書き遺したものにだけに、充分火屋を磨いて意識の洋燈を明るくするだけの用意はある筈である。

芭蕉の「紀行もの」は「甲子吟行」にはじまり「鹿島紀行」「芳野紀行」「更科紀行」を経て、「奥の細道」に終つてゐる。そして「奥の細道」が登りつめた天辺であるといふの

が定説である。

これ等の「紀行もの」に散在する作品を点検することにしよう。

「甲子吟行」(又称「野曝紀行」)には四十有余の作品が収められてゐるが、就中光度の明るいものは

砧打つて我に聞かせよや坊が妻
海暮れて鴨の声はのかに白し
年くれぬ笠きて草鞋はきながら
光度これに次ぐものは

野ざらしをこゝろに風のしむ身哉
秋風や藪もはたけも不破の関
あけぼのやしら魚白きこと一寸
春なれや名もなき山の朝がすみ
山路来て何やらゆかしすみれ草
からさきの松は花より麗にて
或は

霧しぐれ不二を見ぬ日ぞおもしろき
道の辺の木槿は馬に喰はれけり
馬をさへながむる雪のあした哉
で、あとは燈が消えてしまつてゐる。

それに地の文章が、なみなみならぬ名文であるだけに、いい作品でもうつかりするとその光を文章のために奪はれんとしてゐる。「砧」の句にしてからが、「ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに山深く、白雲峰に重なり、煙雨谷を埋

んで、山賤の家処々にちひさく、西に木を伐る音東にひびき、院々の鐘の聲は心の底にこたふ」「ある坊に一夜をかりて」のあとで読むと——俳句としての独自のほりがあるとはいふものの——どこやら旗色の悪いところが見えてゐる。

(因に、「年くれぬ」の句は、芭蕉に於ける生活俳句の典型である)

「鹿島紀行」には

月はやし梢は雨を持ちながら
の外には、絶えて見るべき作品はない。

「芳野紀行」(又称「卯辰紀行」)には五十有余の作品が載せられてゐるが、就中光度の明るいものは

鷹ひとつ見つけてうれしいらこ崎
ひとつ脱いでうしろに負ひぬころもがへ
光度これに次ぐものは

旅人とわが名よばれん初しぐれ
春立ちてまだ九日の野山かな
何の木の花とはしらずにはひ哉
神垣やおもひもかけず涅槃像
草臥れて宿かるころや藤の花
灌仏の日に生れあふ鹿子かな
或は

さむけれど二人寝る夜ぞたのもしき
枯芝ややや陽炎の一 二寸
箱根こす人もあるらしけさの雪

で、あとは燈が消えてしまつてゐる。

〔因に、「ひとつ脱いで」の句は、前掲「年くれぬ」とともに、芭蕉に於ける生活俳句の典型である〕

「更科紀行」には十句あまりの作品の内

いざよひもまだ更科の郡かな
吹き飛ばす石は浅間の野分かな
の外には、見るべき作品は見当らぬ。

「奥の細道」には五十有余の作品が録されてゐるが、就中光度の明るい作品としては

荒海や佐渡によこたふ天の川
の右に出づるものはない。つゞいて

行春や鳥啼き魚の目は泪なみだ

あらたふと青葉若葉の日の光
野を横に馬牽きむけよほととぎす
閑さや岩にしみ入る蟬の声
五月雨をあつめて早し最上川
暑き日を海にいれたり最上川
あか／＼と日は難難面も秋の風
浪の間や小貝にまじる萩の塵
の諸作品がその光度を争つてゐる。

夏草や兵どもが夢のあと

は、「夢のあと」で茫莫となつてしまつてゐるし、その上に、「国破れて山河あり。城春にして草青みたり」と、笠打敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ」といふ名文のあとで読むせ

いか、手も足も出ないといふ感じがする。

大雑把ながら、「紀行もの」の作品を点検すると、かなりひどいむらのあることがわかる。

芸術に於て、屢々「芸」といふことが問題にされる。「芸」といふのは、説明を超えたものだけれど、強ひて説明をつければ、「すぐれた創作力の維持」だといふことが出来る。普通、「芸」は「すぐれた創作力」そのものを意味するやうにとられがちであるが、勿論、それは創作力の卓拔さに関する限り、謬つてはゐない。かといつてそれで充分だとも思はれない。「すぐれた創作力」が、偶発的なものではなく「芸」といはれるが為には、それが維持されたいふことを必要とする。

しかし、「すぐれた創作力」は、いつも「高められた芸術意識」によつて、支へられ、推し進められてゐるのであるから、「芸」の問題は、究極に於ては芸術意識の問題につながつて来る。

ところが、芭蕉にあつては、俳句意識に燈をとぼすことが第一の問題であつた。それが緊急先決の問題であつた。その芯をのばして光度を明るくすることは、いづれかと云へば、第二の問題であつた。

芭蕉はとにかくこのことに魂をうちこんだ。芭蕉はこの重荷を負うて遠い道を歩いた。いつも創始者といふものが負はされる不幸なこの重荷を。

芭蕉は、かくして、俳句に魂を入れた。しかし魂を入れた

といふものゝ、何かと勝手の悪いこと、手慣れないことが多く、その意識の点になると、乳児の頸のやうになほ定まらぬところがあつたにちがひない。曩に指摘した「作品のむら」は、このことの確証をなしてゐる。

芭蕉の作品とあれば、いかなる作品にてもあれ、泪をこぼさんばかりにするのは、あれは一種の排物主義である。芭蕉の作品に接するときは、芭蕉の洋燈を正面から直視すればいいのだ。眩しい作品がいゝ作品である。

芭蕉は、俳句意識に燈をとぼし、ときにこれを明かならしめた。さうなればいゝ作品の数量などは問題ではない。その偉業に対して九十度の最敬礼をするばかりだ。

私は多くの独断を語つた。
〔古典研究〕昭和12年8月

嵯峨日記

1

いつか、歌人の川田順氏と、卓を隔てゝ、いろいろ文芸の話をしてゐたときに、川田氏は私に

「いつたい、日本で誰が一番いゝ文章を書いただらうか」といふ問を發せられました。

私は、この問題は、時代をはつきり区切つてからでないと思へられないと思つたものですから、直ぐ

「時代は、明治以前ですか、明治以後ですか」

と問ひかへしました。——そのとき私は、現代なら、例へば

永井荷風氏の「澤東綺譚」のことか、川端康成氏の「雪国」のことに就いて語ればいいゝと思つてゐたのです。更に場合によつては、新聞記者の書く記事のことに就いて語つてもいいゝと思つてゐたのです。別に異を樹てる訳ではなく、私は新聞記者の書く記事といふものを、高く買つてゐる者です。新聞記者が、欲得なしに書くところの記事には、とてもいゝ文章のあることを知つてゐるからです。

もし、現代でなく、昔のことだとすると、さて誰の文章を推したものと、突確の間に、私は思ひわづらつたものです。困つたことに、川田氏の問は、

「古人なら、誰だらうか」

といふのでした。

私は、その当時、ある必要から、芭蕉の書いたものを、久し振りで読みかへし、芭蕉の文章にはいまさらの如く感服してゐた矢先でしたので、前後の考もなく、

「芭蕉の文章なんかは、名文の方なんじやないでせうか、殊にその『紀行もの』は」

と答へてしまひました。それに対して川田氏は

「芭蕉の文章は、たしかに名文だが、あれは君、漢文脈のものだね」

と云はれました。これは芭蕉の文章に対する評言としては、まことに的確な、まちがひのない評言だと思ひました。

まことに、芭蕉の書き遺したものは、「野曝紀行」「芳野紀行」「更科紀行」「奥の細道」等の「紀行もの」にしても、

「幻住庵記」をはじめとする四十有余篇の「小品もの」にしても、その程度の差こそあれ、何れも漢文脈のもので、実に歯ざれがよく、簡潔で、含蓄の深いものばかりであります。

芭蕉は、「芳野紀行」の中で「そもそも道の日記と云ふものは、紀氏、長明、阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余はみな倅似かよひて、その糟粕をあらたむることあたはず。まして浅知短才の筆に及ぶべくもあらず」と書いてゐますが、これは芭蕉の謙遜で、その証拠に、例へば紀貫之の「土佐日記」を繕いて見ましても、なるほど部分的には、極めてすぐれた描写がありますが、きりつとひき緊つたところがなく、どことなくふやけたところがあります。少くとも「土佐日記」は、芭蕉の文章の敵ではないと思ひます。

ところが、これから読んで見ようとする「嵯峨日記」は、芭蕉の他の文章とは、いさゝか趣を異にしまして、同じ漢文脈とはいふものの、文章に構へたところがなく、全体の調子がいかにもおだやかで、くつろいでゐる点が眼に立ちます。又この文章くらゐ、芭蕉そのひとが身辺近くに感ぜられる文章は、他には見当りません。さういふ意味合から、私は特にこの「嵯峨日記」を選びまして、皆様とともに読んで見ようと思ふのです。

話の順序としまして、まづ、この「嵯峨日記」は、芭蕉の生涯の、如何なる時期、如何なる状態に於て書かれたものであるかを、明かにして置く必要があらうかと思ひます。

芭蕉が、ほんとうに自己の芸術を確立せんとしたのは、年

代にしまして貞享年間、芭蕉の四十一歳以後のことですが、芭蕉は貞享元年（一六八四）八月、江戸深川の庵を立ち出で、伊賀へ帰郷したのを始めとしまして、貞享四年八月には常陸の鹿島に月を觀、同じく十月又々伊賀へ帰郷し、翌元禄元年八月には、信濃の國、更科の月を賞して江戸に帰り、元禄二年の三月には奥羽を経て、北陸に入り、伊勢に至る大行脚を決定しました。所謂「奥の細道」はこのときの貴重な記録であります。

その後、元禄三年四月には、石山の奥の幻住庵、八月には栗津養仲寺の境内にある無名庵、元禄四年四月には嵯峨の落柿舎等に、しばしが程、身を横へ、出入の息もしづかに、休息の生活を送りました。

しかし、その年の十一月には、既に江戸に立ち歸つてをります。元禄二年三月、奥の細道に分け入つてから、かれこれ三年の間、東西に漂泊してゐたのであります。

その江戸の生活も、席の暖る隙がなく、元禄七年五月には、又もや伊賀へ発足してをります。この旅行は、芭蕉にとつては、図らずも、最後の旅となりました。即ち九月二十九日大阪で痼病に倒れ、十月十二日には、御堂前南久太郎町、花屋仁左衛門の裏座敷でその生涯を終へてゐます。時に芭蕉五十歳。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

は、そのときの病中吟で、辞世の句になつたものですが、旅に明けて旅に暮れ、旅に寝こんだときが、即ち芭蕉最後のと

きだつたのです。

かくて、芭蕉の生涯は、謂はゞ旅の生涯でありました。「旅を栖^{すみか}と」した生涯でありました。流転の生涯でありました。

その間にあつて、幻住庵とか、落柿舎に於ける芭蕉の生活は、しばし旅を忘れ、疊の上にくつろいだ生活のやうに見えます。殊に落柿舎に於ける芭蕉の生活だけを見ますと、人眼には閑雅な、静寂な生活のやうに見えます。しかしながら、これとても、芭蕉の生涯から看ますと、やはり旅の一部分であり、旅の中途であり、流転のなかにある僅かなよどみに過ぎませんでした。あたかも、デイスル・エンジンの震動の激しい船室とか、耳のなかで車輪が鳴りとどろく寝台車で、寝てゐるといつたやうな生活でした。

思へば芭蕉の生涯は、俳句といふ芸術をうち樹てる為に、ほんたうに休息のない、泣くに泣かれぬ、悲壮な生涯だつたのです。

「嵯峨日記」は、芭蕉の生涯の、さういふ時期、さういふ状態に於て書かれたものであります。

「嵯峨日記」を読んで、直ぐ気のつくことは、奥の細道をはじめ、他の紀行文では、芭蕉の眼がより、多く外界の自然に向けられてゐるのに対して、こゝでは芭蕉の眼はその身邊に注がれ、その生活に向けられてゐることです。これが為に、この日記には、芭蕉といふ人間が、まるで現代の人のやうに、私達の極く近くに坐つてゐるやうな感じがします。

芭蕉に親しまうとする者は、その作品や、他の文章を見ただけではいけません。この「嵯峨日記」をこそ読むべきです。

2

「嵯峨日記」は、芭蕉が嵯峨の落柿舎に於て、元禄四年四月十八日から、五月四日にかけて書いた日記であります。落柿舎は門人去来の別荘、芭蕉ときに四十八歳。日記は、

元禄四、辛未、卯月十八日、嵯峨に遊びて去来が落柿舎に至る、凡兆ともに来りて、暮におよびて京に帰る。

予は猶しばらくとむべきよしにて、障子つゞくり、葎引きかなぐり、舎中の片隅一間なる処、臥処とさだむ。

机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置き、唐の蔣繪書きたる

五重の器に、さまざまの菓子をもり、名酒一壺、盃そへたり。夜のふすま、調菜の物ども、京より持ち来てまづ

しからず、我貧賤をわすれて、清閑をたのしむ。

と、書き起されてゐます。冒頭のこの条を読みますと、師の芭蕉に対する、去来の心づかひが、実に隅々までゆき亘つてゐることを知ります。去来は師を迎へる為に、わざわざ障子をつくろひ、雑草を引きぬき、舎中の隅の一間を寢室に定めました。調度としては、机、硯、文庫を備へ、机の上には、白氏文集、本朝一人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、松葉集など芭蕉の愛する書籍を置き、重箱にいろいろな菓子、いゝ酒を一壺、それに盃、蒲団や、台所道具は京都から持つ

て来ました。芭蕉はこれ等のものにとりまかれて、こゝろゆたけく、「我貧賤をわすれて、清閑をたのしむ」と書き記してゐます。去來の心づかひにすっかり満足してゐる芭蕉が眼に見えるやうではありませんか。

今だつたら、先生はホテルに泊らされ、洋食を食べさゝれ、御高話拝聴や、揮毫に、夜遅くまで悩まされるところですが、去來が芭蕉をして清閑をたのしませてゐるのは、実に最高の接待だと思ひます。

十九日は臨川寺に詣でゝゐますが、こゝで特にとりたてゝ云ふべき程の事柄はなく、日が傾いて落柿舎に帰つて来ました。前日京へ帰つた凡兆が再び京より出向いてまゐり、これと入れ替りに去來が京へ帰りました。「宵より臥す」とありまして、この日は宵寝をしてゐます。

二十日は、羽紅夫婦と、去來が訪ねて来ました。

この日の記述のなかに、落柿舎のありやうがやゝ詳しく書いてあります。読んで見ますと、

落柿舎はむかしの作るまゝにして、処々頽破す。なかなか作りみがかれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ、心とゞまれ。彫せし梁、画ける壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる、竹縁の前に柚の木一もと、花かうばしければ云々とあります。

一説に拠れば、落柿舎は、もと三井秋風の別荘であつたのを、去來が譲り受けたのだといふことですが、その真偽は兎

も角としてこの文章に見える「むかしの作るまゝにして」とか「なかなか作りみがかれたる昔のさまよりも」などといふ文句は、さういふ前の所有者を頭に置いて味ふべきでありませう。

それからこの文章を見てもわかるやうに、落柿舎は、もとは梁に彫をし、壁に画をかい、作りみがいた立派な家だつたのです。又この日記の最後に出て来る五月四日の条にも「明日は落柿舎を出でんに名残をしかりければ、奥口の間一間を見めぐりて」とありますから、その当時は、現在のこつてゐる落柿舎とは異つて、かなり間数が多かつたこともわかります。

芭蕉は、今日のこつてゐる明白な記録に拠れば、元禄二年十二月二十四日、例の奥の細道の旅の終りに、伊勢から、伊賀、奈良を経て、京に上り、この落柿舎に遊んでゐますから、このたびは二度目の来遊であります。

落柿舎の内外を、しづかにうち眺めながら、いまは処々頽破し、梁や壁が風に破れ、雨に濡れて、奇怪な石や松が葎の下にかくれた落柿舎のたゞまびに、却て心をとどめ、竹縁の前に柚の木が一本、かんばしく花を咲かせてゐるのに心惹かれて句をものしたりしました。

この日の句に

ほとゝぎす大竹藪を もる 月夜

といふのがあります。

落柿舎は、竹藪にとりかこまれ、その附近はまさに竹藪だ

らけです。「大竹藪」の「大」の字は実によく利いてゐますし、又音調も重々しくひびきます。をりからの月夜で、月光が竹の叢葉をこぼれて、斜に深くさし入り、藪の土をあらさまに照らしてゐます。さういふ嵯峨の竹藪の中空を、ほととぎすが啼いて過ぎました。

私はいつも、この句を見る度に、映画館の暗闇を、映写機から映写幕へ、蒼白い光がさしわたつてゐる情景を想ひ浮べて、この句はずるぶんハイカラな感じのする句だなど、思つたりするのです。

この句の次に

去来兄の方より菓子調菜のものと贈りて、今宵は羽紅夫婦をとめて、蚊帳一張に五人こぞり臥したれば、夜もいねがたくて、夜半過ぐる頃よりおのおの起き出で、星の菓子盆など取り出で眺めかきまで晰明す。

とあり、すこしとばして「明くれば羽紅凡兆、京に帰る。去来猶とどまる」とあります。

芭蕉のほかに、去来、凡兆、羽紅夫婦の四人が、一つの蚊帳に、みんなで寝たものですから、寝にくくて、夜半過ぎ頃から、みんな起き出で、菓子盆の菓子をつまみ、明方ちかくまで話し明しました。この日は去来が残り、凡兆、羽紅夫婦は京へ帰りました。

この条を読んでもゐますと、ふだんは俳聖などゝ、偶像視されてしまつて、いかにも窮屈さうに見える芭蕉が、唯の人間

になりさがつて、菓子などを頬張り、夜ふかしをしてゐるさまが、まるで現在生きてゐる人のやうに、つい眼の前に見えるやうな思ひがします。

廿一日は

昨夜は寝ざりければ心むづかしく、空のけしきも昨日に似ず、朝より打ちくもり、雨折々おとづれて、終日眠り臥したり。暮に及んで去来、京に帰る、今夜は人もなく、昼臥したれば夜もねられぬまゝに、幻住庵にて書き捨てたる反故を尋ねだしてなぐさみに清書す。

と書き記されてゐます。

天候は曇り少雨、この天候は芭蕉の身体の調子に、影響してゐたにちがひありませんし、それに何といつても昨夜の睡眠不足がこたへて、気分がすぐれず、不機嫌だつたものと見えます。芭蕉は、これを率直に、いつはらずに「心むづかし」と書いてゐます。そしてこの日は、終日眠りつづけました。一人残つた去来も暮方には京へ帰りまして、夜分は誰も居らず、昼寝をした所為か、夜になつても寝られないので、幻住庵で書き捨てた反故などを探し出して、慰みに清書をしたりしました。

さういふ記述を読むにつけても、芭蕉の人間そのものの、芭蕉の疲労した肉体と、弛緩した精神とが、まことにありありと、さながらに描かれてゐることを感ずるのであります。

私は「嵯峨日記」のうちでも、殊にこの二日の記述を通して、日常生活に於ける人間芭蕉をしつかりと捉へることが出

来ると思ふのです。

廿二日は、

朝の間雨降り、今日は人もなく、さびしきまゝにむだ
書して遊ぶ。其詞

喪に居るものは悲しみを主とし

酒を飲むものは楽しみをあるじとし

愁に住するものは愁をあるじとし

徒然に住するものはつれづれを主とす

さびしきなくばうからましと西上人の詠み侍るはさび
しさを主なるべし。又詠める。

山里にこはまた誰をよぶこ鳥ひとりすま

んとおもひしものを

独すむほどおもしろきはなし。長嘯隠士の曰く、客は

半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此

こと葉を常にあはれむ。予も又

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に独居していひし句なり云々

とあります。

兩日独居、人が大勢ゐた為に、なにやかやと、濁らされが
ちであつた芭蕉の心境は、独りになれば、しだいに澄みとほ
つて来たのです。この日の芭蕉は、「さびしさ」といふもの
に涵りきつて、西行法師の「とふ人もおもひ絶えたる山ざと
の寂しきなくばすみうからまし」といふ歌を引用したり、自
分も調子づいて、「山里に」の歌を詠んだり、「独すむほどお

もしろきはなし」などと云つて、人のおとづれによりみすみ
す清閑を失ふことを嫌うたりしてゐます。

そして、独居してゐる自分はさびしさを主とし、さらにそ
のさびしさに徹したいのだといふ心持を、以前に伊勢の長島
のある寺で作つた、

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

といふ句によつて代弁されてゐます。

郭公鳥よ、憂鬱な自分を、お前のさびしい啼声で、もつと
もつとさびしがらせてくれといふのです。（これは「さびし
さ」による自己被虐です。）

もつとも、芭蕉が他の機会に書いてゐる、「閑居箴」とい
ふ小品には

あら物ぐるさの翁や、日ごろは人の訪来るもうるさく、
人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心に誓
ふなれど、月の夜、雪のあしたのみ友のしたはるゝもわ
りなしや。ものをも言はずひとり酒のみて、心に問ひ心
にかたる、庵の戸おしあけて、雪をながめ、又は盃を取
て筆をそめ、筆をすつ。あら物ぐるはしの翁や。

酒のめばいとゞねられぬよるの雪

とも書いてゐますから、時と場合によつては、さうやつて相
手が欲しくなることもあるのです。人をいとひ、人をしたふ、
これは矛盾でもなんでもありません。人をいとひ、人をし
たふといふことのうちに、芭蕉の人間性が、はつきりと描か
れてゐます。

本文にかへりまして、この日のあとの方には、暮方に手紙が着いたことが書き添へてあります。

廿三日は、俳句ばかり。

廿四日は、去来、凡兆などの往来と手紙のこと。

廿五日は、人々の往来のこと、その末尾に、

申の刻ばかりより、雷霆電降、雲龍空を過ぐる時、電降る。大なるはから桃の如し。ちひさきは柴栗の如し。と記されてゐます。

即ち、午後四時頃から、雷が鳴つて、電が降つた。大きいのは唐桃、小さいのは柴栗ぐらゐだつたといふのです。この辺の描写は実に生々としたうまい描写だと思ひます。

廿六日はとぼして

廿七日は、

人來らず、終日得閑

とあります。人々の往来がすこしはげしかつたなと思ふと、ひよつこり、誰も来ない一日に恵まれて、またまた清閑をたのしむことが出来たのです。

廿八日は、芭蕉が殊に愛してゐた門人で、先年没くなつた杜国を夢に見て泣いてゐます。

こゝの文章は、すこし気どり過ぎてゐて、多少よそゆきになつてゐるのは遺憾なことです、僅かに

我に志深く、伊陽旧里までしたひ来りて、夜々床を同じく起きふし、行脚の勞をたすけて、百日がほど影の如く伴ふ、片時もはなれず。或時はたはむれ、或時は悲み、

其志わが心裏に染みて、わするゝこと為ければなるべし。覺めて又袂をしぼる。

とあるあたりは、フロイド流に云へば、所謂潜在意識なのですが、芭蕉の情の世界に触るゝことが出来、やはりついそこに芭蕉そのひとを見る思ひがします。

廿九日、三十日は、漢詩の話や、人の往来、手紙のことが書かれてゐます。

二日は、

曾良来りて、芳野の花を尋ね、熊野に詣で侍るよし。

武江旧友門人の嘶、かれこれとりまぜて談ず。

夕陽にかゝりて、大井川に船をうかべて、嵐山にそうて戸難瀬をのぼる。雨降り出で、暮に及んで帰る。

とあります。

奥の細道に同伴した曾良の訪れを、喜び迎へて、ねんごろに旅の話、江戸の話をとりかはし、夕方には、大堰川に舟を浮べて遊んだことが、淡々とした筆致で書かれてゐます。

三日は

昨夜の雨降りつくこと終日終夜止まず。尚其武江の事ども問語、既に夜明くる。

とありまして、曾良となほ江戸の話のしのこしをしてゐます。芭蕉の清閑は、曾良の來訪によつて又もや妨げられました。果せるかな、

四日は

宵に寝ざりける草臥に終日臥す。昼より雨降り止む。

明日は落柿舎を出でんに、名残をしかりければ云々とあります。

これで「嵯峨日記」は終つてゐます。

思へば、落柿舎に於ける芭蕉の生活は、清閑のあとに、煩勞があり、煩勞のあとに清閑があり、清閑と煩勞とをあざなうた生活でした。しかも、それとても旅のうちのほんの一節といつてもいゝ生活だつたのです。

芭蕉は、落柿舎を出て、京に向ひ、東海道を下つて、江戸に帰りました。

了OK「夏季青年読書講座」昭和12年7月27日

須磨・明石

貞享五年といふのですから、今からざつと二百五十年前、芭蕉が須磨を訪れてをります。その時の旅行は、前の年江戸を出て、故郷の伊賀に春を迎へ、吉野の花を見、和歌の浦に行く春を惜み、灌仏の日に奈良に遊んで、須磨に着いたのは四月十九日のことでした。

その時芭蕉は、船で尼崎を発ちまして、その夜は兵庫に泊り、翌日は築島を右に見て、和田の岬に上陸、笠松・安徳帝の内裏址・遠矢の浜・忠度塚などを過ぎて、現在の須磨区に足を踏み入れました。先づ松風村雨の旧蹟を訪ね、西須磨へ入つて須磨の関趾に心をとめ、鉄枌山に登つて四方を眺め、往時を回顧し、降りて敦盛の石塔に詣でました。

芭蕉の通りましたこの道を、私も花を尋ねながら歩いて見ることにしました。

省線須磨駅で、明石行の電車を降りました私は、バスで離宮道まで引返し、山手に武庫離宮を仰ぎながら、緩やかな坂道を登りました。

やがて電車の踏切を越えますと、東側に松風村雨堂があります。

平安朝の頃、在原の行平が、須磨に謫れてゐましたことは、正史には見えませんが、行平の作りました

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれ
つつわふと答へよ

といふ歌の前書には、文徳天皇の御時に「津の国の須磨といふ所に籠り侍りけるに」と書いてあります。この歌は、「わくらばに」即ちひよつとして自分のことを尋ねるひとがあつたら、須磨の浦に「しはたれつつ」即ち悲しみに沈んで、さびしく暮してゐると答へて貰ひたい、といふ程の意味ですが、その佐び住みの行平が、或日、渚に出て汐を汲む姉妹に遭ひ、宿は何処と尋ねましたところが、

白波の寄する渚に世を過す海人の身なれば宿も定めず

と答へましたので、行平はすっかり感心して、姉を松風、妹を村雨と名づけたといふのが所謂松風村雨の伝説です。

境内には、松風村雨と刻んだ石塔、ささやかな堂、行平の衣掛松といふ巨きな松の根株があり、その上に笠松が覆つて